

アドベントからお正月にかけてのクリスマスのシーズンを、これほど静かに、穏やかに過ごしたのは初めてです。現役で教会で働いていた時は、準備、準備。その先に待っている喜びにワクワクしながらも、気持ちが張りつめていました。それでも、クリスマスの音楽を聞きたい気分があって、仕事をしながら、また、寝る前にヘンデルのメサイアや、バッハのクリスマス・オラトリオを聞いたものでした。いわば、BGM 感覚で、音がしているなあ…という感じでした。

今、この静けさ、穏やかを与えられ、感謝しながら、クリスマス・キャロルのCDを聞き、自分の心がいっしょに歌っていると感じます。数日前も夜明け前に目が覚めて、私は温かく着込んで、コーヒーを飲みながら、CDを聞き進んでいきました。クリスマス・キャロル集「マリアの子守唄」というCDの後半に、静かな、穏やかな曲が流れてきました。それは何度か聞いて、耳に残っている、カタロニア地方の民謡「鳥の歌」でした。この時まで、私は「鳥の歌」がクリスマス・キャロルだということを知りませんでした。解説を読むと、歌詞はキリスト降誕を歌ったもので、「みどりごを歌い迎えるのは鷹、雀、小夜啼鳥、そして小さなミソサザイ」と歌われると書いてありました。



鷹



雀



小夜啼鳥



ミソサザイ

チェロ演奏家のパブロ・カザルス(1876-1973)は亡くなる2年前の1971年10月に、国連本部で「鳥の歌」を演奏しています。演奏前に、カザルスが「鳥の歌」を解説しました。その後、演奏を聞いた聴衆は深い感動に包まれました。以来、この歌は非常に有名になっています。

私はこの曲をほぼ40年間演奏したことがありません。

今日は演奏しなければなりません。

この小品は「鳥の歌」と呼ばれています。

鳥は空で歌うのです、「ピース!ピース!ピース!」と。

その音楽は、バッハ、ベートーベンや偉大な人々が愛し、褒め称えたであろう音楽です。

非常に美しく、また、私の国、カタロニアの魂なのです。

スペインの当時のフランコ政権に反対したため、亡命せざるを得なかったカザルスにとって、愛する祖国の民謡は魂の叫びであったのでしょ。そして、それは平和を求める祈りに等しいものだったのでしょ。クリスマス・キャロルですから、鳥たちは、静かな夜に、澄んだ声で、「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ」と、天使の賛美に合わせて、歌ったことではしょ。

持っているCDを捜してみると、いくつかのクリスマス・キャロル集のCDに、器楽で「鳥の歌」が入っていました。また、ネットで検索してみたら、「連歌 鳥の歌」というプロジェクトがあって、様々なジャンルのアーティストが魂の叫びのようにこの曲を演奏しているサイトがありました。静かで、穏やかなだけではなく、空を飛ぶ自由さ、歌う喜び、小さいながらの強さ、子守唄、親しみやすさ、悲しむ者への慰め、深い愛、祈り… そのように聞こえてきました。それが平和なのだと感じさせられます。

クリスマスはこのように、平和を求めて、歌う時なのだとしみじみと思えてきました。私の住いは「ひばり団地」にあります。この地域には、こまどり、めじろ、かもめ、ちどり、うぐいす、つぐみ、せきれい、おおるり、しらさぎ、ひよどりと小鳥の名前の団地が並んでいます。それぞれが、自由に「鳥の歌」を歌いたいですね。もちろん、♪ピ〜ス♪ ♪ピ〜ス ♪ピ〜ス♪ です。